

状を呈し、側面から見ると裏面に方向に突き出す弧状を呈する。上部両端が円形状に欠損しているため、腕部がついていたも可能性も考えられる。表面は2条の円形沈線を中心に左右と下部に弧線文、上部に直線状の沈線が施される。裏面は無節縄文施文後、中央に渦巻き状の沈線を施文し、その左右に弧線文、上部に1条の横位沈線、下部に2条の横位沈線を施文する。E 40 グリッドの2層から出土しており、土器出土量の関係からI-2段階としているが、耕作土直下であり、攪乱を受けている可能性もある。20は晩期の土偶の胴部である。表面は胸部と腹部に刻みが施される円形の貼付を施し顔状を呈する。腹部の口状の貼付の左右及び腋部に三叉文が施される。裏面は、中央に入り組み三叉文が施文されその内側に単節RL縄文が充填されるようである。沈線はいずれも深く施される。胎土に雲母等の粒子を多量に含み、色調が淡褐色を呈することから、在地で製作されたものではない可能性もある。21は中空土偶の腕部あるいは肩部の破片であろうか。外面は隆帯を貼付後、単節RL縄文を施し、その後沈線や三叉文を施す。黒色を呈し、ごく一部に赤彩の痕跡が認められる。内面は粗い作りである。22は土版の破片である。表面に眉、目及び鼻を表現した隆帯を貼り付ける。

引用文献

山本哲也 1989「君津地方の土偶」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅲ（財）君津郡市文化財センター

（2）土器片錘（第73・78図）

土器片に挟りがあるものを土器片錘とした。一部挟りが不明瞭なものも含む。合計64点出土した。段階別の出土点数をみると、表土（耕作土）と出土層位不明を除いた46点中、I-1が3点（6.5%）、I-2が30点（65.2%）、IIが2点（4.3%）、IIIが9点（19.6%）、IV-2が2点（4.3%）となり、I-2段階からの出土点数が圧倒的に多い。また、I-2段階では、SI 02とSI 06で多く出土し、第1次調査範囲ではAグリッドのみで出土している。全段階で利用される土器片の型式等をみると、堀之内1式32点（50%）、加曾利B式（1点）0.2%、縄文のみ15点（23.4%）、縄文+紐線文+条線文1点（0.2%）、条線のみ3点（4.7%）、不明12点（18.8%）となり、堀之内1式と縄文のみを合わせた後期前葉が7割以上を占めることとなる。挟りの位置をみると、対向する方向に1対が38点（59.4%）、対向する方向に2対が1点（0.2%）、1箇所のみ3点（4.7%）、対向する1対とその他1箇所が2点（3.1%）、その他・不明19点（29.7%）となる。完形資料の計測値をみると、重量の平均は26.74gで、15～35gが多く利用される傾向にある。最大長の平均は47.90cmで、40～55cmが多く利用される傾向にある。

（3）土製円盤（第74・79図）

土器片に2次加工が施され、主に円形及び隅丸方形状を呈するもので、土器片錘を除く。合計115点出土した。段階別の出土点数をみると、表土（耕作土）と出土層位不明を除いた87点中、I-1が3点（3.4%）、I-2が12点（13.8%）、IIが2点（2.3%）、IIIが32点（36.8%）、IV-1が7点（8.0%）、IV-2が31点（35.6%）となり、III、IV-2段階が多くなる。平面分布をみると、III段階に2トレンチから多量に出土しているのが特徴的である。全段階で利用されている土器片の時期をみると、堀之内1式7点（7.0%）、加曾利B式11点（9.6%）、安行1式7点（6.1%）、安行2式2点（1.7%）、安行3a式8点（7.0%）、安行3b式1点（0.9%）、前浦式1点（0.9%）、縄文のみ10点（8.7%）、縄文+紐線文+条線文4点（3.5%）、紐線文+縄文15点（13.0%）、条線のみ30点（26.1%）、無文3点（2.6%）、不明15点（13.0%）となり、精製土器と粗製土器を合わせると後期後葉以降の割合が高くなる。利用する土器片の部位をみると、口縁部が23点（20%）、胴部が90点（78.3%）、底部が2点（1.7%）となる。これを時期別でみると、口縁部は後期前葉2点（8.7%）、後期中葉2点（8.7%）、後期後葉14点（60.9%）、晩期5点（21.7%）で、胴部は後期前葉15点（16.7%）、後期中葉12点（13.3%）、後期後葉10点（11.1%）、晩期38点（42.2%）、不明